

## ◆平成 25 年度 第 1 回（通算第 34 回） 蔵前ゼミ 印象記◆

日時：2013 年 4 月 26 日（金）

場所：すずかけ台 J221 講義室

### 本年の蔵前ゼミに期待すること

関口 光晴（1966 経営，71 経営 Dr）元本学理事・副学長，蔵前工業会 神奈川県支部長

最終学歴でどこの出身かが決まる。「おお！東工大か」となるので、この期待を裏切ってはいけない。社会の判断基準は「どんな仕事をしたか」であって、偏差値ではないので、本ゼミが掲げる「就職はゴールではない」を肝に銘じておいて欲しい。2012 年 12 月 25 日号の The New York Times に世界大学ランキングが発表された。世界 20 カ国のトップ企業の採用担当者 数千人に「どの大学の出身者を採用したいか」を聞いたものだ。ハーバード大，エール大，ケンブリッジ大，オックスフォード大，スタンフォード大，MIT，…と続いて，本学は 14 位に入った。東大は 23 位，京大は 47

位だ。企業から見れば 本学が いかにも魅力的かがわかる。これは OB/OG の実績だが，皆さんも是非先輩を見習っていい仕事をして欲しい。それには同窓会（蔵前工業会）のネットワークを利用して仕事のしやすい環境を作り上げるのも有効だ。これからは他分野の人と一緒に仕事をすることが多くなるが，そういうときにリーダーシップを発揮できるように，在学中に身につけておいてほしいことがいくつかある。それを提供するがこの蔵前ゼミの使命でもある。今日は皆さんの 12 年後のモデルとして，海老塚さんに話してもらおうので，どんどん質問して食欲に吸収して欲しい。

### 企業の環境経営

海老塚 真（1999 無機材，2001 物質科学 MS）神戸製鋼所 環境防災部 課長

これは難しいだろうと思う質問にも，“ピンポン”というわけでリズムカルな受け答えが続いた。「環境に関する法令として どんなものを知っていますか？」に対し、「大気汚染防止法」「水質汚濁防止法」「廃棄物処理法」といった具合だ。講師の海老塚さんは後輩を頼もしく思ったに違いない。環境意識の高い聴衆とわかれば，話し甲斐もあっただろう。学生の間から法令の名前が出てきたのには驚いた。というのは，私は去年まで学部の 1 年生を対象に大教室で「環境安全論」を教えていたが，無味乾燥な法律<sup>(注1)</sup>の解説などできる雰囲気ではなかったからだ。そんな話をしようものなら，即スマートフォンに負けてしまうはめになっただろう。そこで，これだけは覚えておくようにと“PRTR”<sup>(注2)</sup>の 4 文字を大書し，試験に出しますよとまで念を押しておくのだが，期末試験では期待を裏切られることが多かった。聴衆の多くは修士課程の学生であることを考えると，PRTR に出会ってから数年のうちに長足の進歩を遂げていたのだ。海老塚さんの質問の仕方も印象的だった：「目が合いましたね。緑色のシャツを着た君どう？」。目が合っただけで恋に落ちて行動に移せなかつ

た昔を思い出した。

海老塚さんは 1995 年に本学の 2 類に入学した。卒論と修論ではガラスを溶かしたときの物性変化（イオン交換特性など）を丹念に調べた。後輩には，大事なものは研究の内容ではなく，研究のやり方を学ぶことだと伝えたいそうだ。これが社会に出てから思いのほか役立っているとのことだった。研究を一生懸命やっていたら，企画立案力・段取り力・集中力・洞察力はもちろんのこと，セミナーや学会発表を通じたプレゼン力，要旨や論文書きで身につく文章力，隣の研究室の装置を借りるための交渉力，決められた期限内にある程度の成果を出すという納期の概念，教授や助教あるいは後輩の間を取り持ってプロジェクトを進めるといふ調整力など，知らず知らずのうちに，社会に出てから必要となる能力に磨きがかかる。考えてみれば本学が大事にしてきた「研究に裏打ちされた教育」は時代遅れどころか誇るべきやり方なのだ。研究室で存在感を示せれば，会社でも仕事を任される。これに「蔵前ゼミ」が加われば文句なしだろう。

海老塚さんが勤める神戸製鋼所といえばラグビーが強い製鉄会社というイメージが強いが、実際には温泉熱を利用したバイナリー発電設備や下水処理で発生するバイオガスを利用するためのプラント建設、さらには老人ホームの経営まで手掛ける多角経営企業だ。神戸製鋼という名前からくる硬いイメージとは対照的に、社内の風通しはよく、社員食堂で社長に会うと「エビちゃん、この頃どうよ」と声をかけられるそうだ。若いうちから責任ある仕事をさせてくれ、人を大事にする会社でもあるそうだ。海老塚さんの生き生きとした目を見ながら、会社にとっては「人をしっかり見て育てる」ことが物を作ることに上にあることではないかと思った。

そのような神戸製鋼で環境の仕事をしよと考えた理由はこうだ。海老塚さんは「将来にわたって必要とされる人間になりたい」と思っていた。製鉄所に代表されるように、日本のものづくりの現場を見てみると、環境への配慮は欠かせない。これはあらゆる業種にいえる。環境の専門家は10年後、20年後も必要とされているだろう。しかも社会のためになる。こう考えて海老塚さんは環境問題に直接関わる道を選んだ。12年たってみると世の中は環境の時代で、社内でも「環境経営」という言葉がよく使われるまでになっている。海老塚さんの読みは的中した。

社長に名前を覚えてもらっているということは、それだけの仕事をし、今後にも期待されているということだ。入社早々に、「環境報告書」の作成を任せられ、全部門の協力を取り付けて、立派な「作品」に仕上げた。これが高く評価されたのだろう。それ以来、若手にもかかわらず、環境がらみの問題となると、海老塚さんに話が来る。環境と安全に関連した法改正等について役員に報告する機会も多いので、社長も“エビちゃん”として一目置いてくれているのだ。私も本学の「環境報告書」の作成に関わったことがあり、海老塚さんの苦労がよくわかった。KOBELCO（神戸製鋼）の2012年版（74頁）を1冊いただいたが、できればと英語名がSustainability Reportであることに感心した。確かに環境を大事にする会社は永く繁栄しそう。最近では、「環境報告書」が会社の顔となりつつあり、優秀な人材確保に一役買っていると聞く。就活のときは、環境報告書も参考にしよう。

製鉄所では水を大量に使う。水をいかに効率よく

使うかが要となる。製鉄所が沿岸部に多い理由は意外と水にあったのだ。鉱物資源やエネルギーに加え、水まで大量に使うとなると環境への配慮なしには企業活動は成り立たない。海老塚さんはいいところに目をつけたわけだ。

環境防災部の仕事には、攻めと守りの2つの側面があるというのも分かり易い話だった。世の中の動向をつかみ、エコ製品を拡販するとともに、環境活動のPRに努める。さらには法規制動向を先取りし、会社の進むべき方向を示すのが「攻め」の姿勢で、「守り」では法令の遵守、環境に配慮した生産活動、トラブルへの迅速な対応などが必要だそうだ。海老塚さんにとって環境の仕事は天職だったわけだが、環境防災部で仕事をする場合に求められる資質として、海老塚さんは次の5点を挙げた。(1) 環境関連法令や設備が理解できること、(2) 誠実で責任感があること、(3) 相手に納得してもらえるような分かり易い説明ができること、(4) 旺盛なサービス精神の持ち主であること、(5) 問題解決能力を備えていること。納得だが、究極的にはこういえるかも知れない。法令や社会的要請であることを笠に着た上から目線の指示派は、どの分野においてもそうだが、いずれやっていけなくなる。環境というと私たちを取り巻く物理的な環境（自然環境）保全を思い浮かべがちだが、一番大事なことは仕事のしやすい「職場環境」作りのようだ。海老塚さんを見習って、同僚に喜んで協力してもらえるような“環境作り名人”を目指そう。

このあと、環境経営（あらゆる面で環境に配慮したものづくりを通して社会的責任を果たすとともに企業価値の向上を目指す全社的な取り組み）、環境問題の変遷、環境問題の現状、環境法規制等について、簡潔で分かり易い説明が続いた。前出の1年生向けの講義「環境安全論」の講師として、海老塚さんを推薦したくなった。環境問題の変遷では、私たち定年世代が歩んだ道そのもので、歴史とはいえ、複雑な思いで聞いた。日本の鉄鋼業は世界最高水準のエネルギー効率を達成している。しかし、環境にあまり配慮しない国々の企業との間で厳しい生存競争を強いられている。環境問題はもはや一地域の問題ではなく、その影響範囲の広がりを見ると、地球全体で取り組まなければ対処できなくなっている。途上国にも一日も早く環境経営の概念が根付いて欲しいと願った。定年世代で思い出したことがある。つい先日、見舞い

に行った慈恵医大の病室から東京タワーが間近に見えた。55年に及ぶ電波塔としての役割を終え、スカイツリーに引継ぎをした時の姿が、定年退職した私自身の姿と重なり、感慨深かった。考えてみれば、東京タワーこそが環境問題の変遷を身をもって体験し、警告をこめて、電波という形で私たちに発信してくれていたのだ。海老塚さんの体験談も迫力があつた。入社8年目の2009年6月30日に、日本政策投資銀行（DBJ）の「DBJ環境格付」において「環境への配慮に対する取り組みが特に先進的」と評価され、100億円もの「優遇金利融資」の獲得に成功したのだ。100億円！鳥肌が立つような話だった。社長も『さすがエビちゃん』と感謝したに違いない。

海老塚さんの話の副題「会社で働くとはどういうことか」については、「社会人としての心得」として5項目にまとめられていた。メモした人も多いに違いない。①会社は組織で動く；個人プレーはNG。②自分の思いを伝え、人を巻き込む。③会社に頼らない（逆に、会社に頼りにされるように；くれぐれも給料泥棒とみなされないように；給料以上のものを会社に提供していると内心誇れるように）。④人脈を大切に（仕事をするとは他人に何かを頼むこと；そのときに一肌脱いでもらえるかどうか！）。⑤電子メールに頼り過ぎない；便利だけど本当に通じている？（訪ねて頼めば、自分の表情・ニュアンス・気持ちまで伝えることができる）。

最後に海老塚さんのメッセージをまとめておこう：(1) 世界を見よ：企業活動のグローバル化に伴い、現地採用が増えつつある。現地に優秀な人たちが育っているからだ。特にアジアにはエネルギーギッシュな若手が溢れている。採用したくても日

本人を採用できなくなりつつあるとしたら大変だ。私達も意識改革をし、海老塚さんを見習ってインターネットでは常に英国BBCのWeb pageが立ち上がるように設定を変えなければならないようだ。そこには日本に関する記事はほとんど出てこない。私たちが一喜一憂している日本のニュースは地球規模ではマイナーで世界情勢に影響を与えるとは考えられていないのだ。残念だが日本発のニュースはめったにヘッドラインにならないようだ。取り残されないためには、少なくとも英語で意思疎通が出来るようにならなくてはならないと海老塚さんは考えている。英語は上手である必要はないが、何とか用をたせるようにはなりたいたいものだ。(2) 将来像を持つ：10年後、20年後の自分のイメージを具体的に描くと、努力目標がはっきりするので、実現する可能性が高くなる。

(注1) 実際には味のある名文なので、基礎となっている「環境基本法」（1993年制定）の総則の一読をお勧めする。

(注2) PRTR: pollutant release and transfer register. 本法は従来の公害関連法令とは異なり、規制という手法をとらない。しかし事業者（大学を含む）が環境に排出した有害化学物質の量を公表することにより、社会的な圧力をかけ事業者の自主的な改善努力を促すことを狙っている。罰則ならばいくら厳しくしても罰金を払えばすむので効果は限定的だったが、「市民の目」となると企業の存続に直結してくるので効果は絶大である。大学でも有機溶媒を20トン購入し、10トンしか回収していないと、近隣住民が騒ぎ、実験が続けられなくなる。

（東京工業大学 博物館 資史料館部門 特命教授 広瀬茂久）